慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	加田哲二著 国家学説と社会思想
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.6 (1922. 6) ,p.884(144)- 887(147)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て表題の如き大著作を完成せしめたるものゝ如し。一書殊に千頁に近き著述を成すが如き、平生學窓に居り、文筆に親む者の尙は容易とする所に非ず、原氏が簿記算勘の傍、之を成就したるの一事は先づ余の敬服する所なり。

本書編を分つこと五、第一編手形第二編銀行の性質第三編銀行の業務、第四編銀行事務取扱手續第五編銀行簿記等なり。是等の內第二編は銀行に關する普通の著書に於て、常に見る所なるが、他の四編に至つては、總て實務家に非ざれば、取扱い難き幾多の問題を經濟、法律並に實務の三方面より詳論し、細說して、殆ど餘地あるを示さず。各種の書式並に記帳の樣式も亦說明を補う爲めに揭げらる。第四編銀行事務取扱手續に關する說明中商品擔保の項に於て、預證券並に質入證券に就て我國の制度を論評したる邊りは實務家の立場より出でたる議論として、傾聽に値するものとす。

余は從來學生より邦語の銀行實務書に就て、質問を受け、答辯に窮したるが、今原氏の著者を得て、多年の喝を醫するを得たり。銀行業の實務を知らんとする者には勿論、銀行業の研究者に一讀を薦む。（堀江歸一）

加田哲二著「國家學說と社會思想」

四六版五五〇頁
定價參圓
下出書店發行

國家とは何ぞや。マルクス（Karl Marx）に從へば、近代的國家は「全有產階級の共同の事務を處理する委員會」であると。ガアナア（J. W. Garner）に從へば、「政治學及憲法の概念としての國家（The State）は、一定の領土を永久的に占有し、外部的支配を受けず、且組織せられた政府——其れに其住民の大部分が傳統的服從を爲す——を有する所の多數の人々（多少の差はあれ）の團體（Community）である」と。

近來我國に於ても、一般に、國家の概念に關して、眞面目に研究を爲し又は何等かの說を成すものが、殖えて來たと云ふことである。また之に關して發表せらるゝ論文も多いやうに思はれる。これは一には、他の理由もあるが、官憲が單なる杞憂を棄てゝ斯る問題を取扱ふ者に對する態度を更めたと云ふことにも因るであらう。然しながら、ポォル・ルロア・ボォリユの述べてゐるやうに、『現代人の間に普通行はるゝ國家の概念、其性質其機能についての概念は極めて混亂してゐる』のである。又其定義に關しても『獨逸の著作者シュルツェ（Schulze）の云つたやうに、國家の定義は、殆んど如何なる著者も其れ自身の說を持ち、二つの似寄つたものも殆んどない位無數である。』（Garner）何となれば『國家の起源、性質、機能についての問題は一見極めて容易のやうであるが、そは最も難解な問題の一つである』からである。

此に私が敢て江湖に推奬したいと思ふものは、加田哲二氏の近業『國家學說と社會思想』である。此著は、近代的思潮の流に從つて棹さす人にとつても又逆つて進まうとする者にとつても——思想上の新傾向を啓示する點に於て——好參考書たるを失はぬと愚考するからである。

本書は氏が最近數年に涉つて諸種の雜誌等に寄稿せられたものを集錄したものであるから終始系統的に起草せられたものではないが、併し單なる斷片ではない。後に述ぶるやうに大體或問題を中心として筆をとられたものである。內容を分つて四篇とする。第一篇はマルクス主義の國家觀、第二篇はギルド社會主義とその國家觀、第三篇は無政府主義の諸問題、第四篇は現代經濟生活の批判と題し、各篇とも數節に分たれてゐる。

本書の表題よりして推則すれば、右四篇中第一篇と第二篇とは最も重きを爲してゐるやうに思はれるであらう。事實此兩篇は頁の大部分を占め、重要なる節を含んでゐる。序文に代へたる一篇を通讀して國家觀上の新傾向を知り而し

て此二篇を綴けば、マルクス主義者及ギルド社會主義者の國家觀及其立場を理解するを得る、殊にギルド社會主義に關する知識を得るには十分であらう。此意味に於て本書はギルド社會主義を中心として執筆されたものと云つても差支へないであらうと思はれる。

姑く著者の所論に從へば、最近の社會思想に於ける國家觀上の新傾向は國家至上主義への反逆である。さうしてこの傾向は以前よりの傾向を確定したものと、新たに唱道されたものとある。前者はマルクシズムに於ける國家論爭であり、後者はギルド社會主義の國家觀である。」而して「國家を以て最高であるとする思想は單に保守的の國家主義者に於てのみ發見し得る思想ではない。彼と正反對の立場にある社會主義者例へばカール・マルクスの思想に出發した社會主義者の中にも國家主義者と稱し得るものを見出すことが出來る。」けれども「國家主義者や集產主義者の國家中心說は、プラトー時代の國家と名稱は同じく國家であつてもその本質に於て多く異つてゐる現時の國家を觀察してみると、それは單に思想の上に於てのみ存在するものとなる。さうして一の政治的單位又は社會的團體の基礎が、共通な意志と利害とに存してゐることを認め、吾々が現代の社會に於ける複雜な人的關係とその多樣な利害の分岐を觀察すると、單に地域的結合團體を以て、唯一の社會的單位とするのは、論理の理由なき飛躍であると共に現實に强ひて盲目ならんとする醜い怯懦である。」であるから何等かの別の組織が必要となる。其はギルド社會主義に依れば、各々その限界を持つてゐる職分的團體であつて各々相侵すことの許されない所の、地域的國家と產業的ギルドとである。「人類の大部分は生產者であるとともに、その全部が消費者である。だから生產者の利害のみを考慮に入れて消費者の立場を全然考へないサンヂカリズムは明かに此點に於て缺陷がある。ギルド社會主義者はこのサンヂカリズムの缺陷を知る丈の明敏さを持つてゐた。彼等は生產者のギルドに對して消費者の國家を認める。斯くて消費者の利益は國家によつて代表せられ、消費に關する範圍の經濟問題に關してはギルド對國家の合議を必要とする。さうして生產者と消費者との利益が確保せられ、地域的消費團體たる國家がその强力な權力によつて生產者を抑壓することが防止せられる。即すべての團體は全社會に對しての最高權力を持ち得ない」と云ふのである。

私は之以上頁を費して內容を紹介するのは控へやうと思ふ。何となれば私の拙き筆によつて著者の名文を損じ意義を誤傳するを怖れるからである。讀者は須く原文について讀まれんことを望む。唯、著者も序文の中で述べられてゐるやうに、此書は氏獨自の國家觀を載せてはゐない。大抵紹介ではあるが、氏が續いて云はれるやうに「それらは皆一度自分の頭腦を通過して來たものである。さうして自己の頭腦を通過して來たと云ふ點に於て、本書の諸篇は私に對して意義がある」のである。此意味に於て紹介者たる私も亦讀者と共に、本書に依つて、著者の立場を了解することが出來ると思ふ。若し其れ本書によつて、從來政治學書中に說かれたやうな國家論を求めんとする人があるならば、其は求むる者の無理であらう。其理由を云へば、著者は之によつて國家觀上の新傾向と社會思想を述べられたものであり、其新傾向とは既に引用したやうに國家至上主義への反逆であるからである。（金原賢之助）